

漢文の文章と詩の有機的連関を図る授業

高谷泰子

一 はじめに

特別進学課の生徒の置かれている環境

松山聖陵高等学校は、愛媛県松山市の西部、市内を見晴らす丘の上にある私立男子高校である。その中に特別進学課がある。この特別進学課は、大学進学者を養成する課として五年前に設立された。しかし、設立して間もないこともあって、学力の低い生徒が少なくない。生徒達の学力が大学進学レベルに達しない原因を考えてみると、単なる学力不足ということだけではなく、生徒達が本当に自分のもっている様々な力を発見し伸ばしていくための精神的な発達不足もまた大きな原因であるように感じる。私たち教師は、いわゆる学力というものを身につけさせながら、自ら修養し自己を豊かにすることのできる精神的な力をも育てなければならぬ。このような認識の上で、漢文の授業の意義について考え、授業づくりを試みた。

二 漢文による授業の意義

生徒達が漢文を苦手とする理由

生徒達が漢文を苦手とする原因は、まず漢字が苦手ということだ。漢字が苦手な生徒は、漢字が表意文字であるということを自然に意識することができず、漢字の意味と読みと形を組み合わせて覚えられない。これは漢文を読む際に大きな障害になっている。

第二の原因は、古文の文法でもって読まなければならない、ということだ。漢字の意味を必死で追って行こうとしている生徒にしてみれば、頭を古文に切り替えるのは大変なことのようにだ。生徒の頭の中では漢文と古文は切り離されているのだ。

生徒が漢文を苦手とする二つの原因をみると、その性質が似ているところに気づく。つまり、関係というものを意識することが、生徒にとって困難だという点である。

関係を見つける力、利用する力は、思考にとってとても

重要なものだ。しかし、これらの力の欠如が、生徒が漢文を苦手とする理由であるなら、見方を変えれば、漢文を読むことによつて、関係を見つづけ利用する力が養われる、と言えるのではないか。

言葉を感じる力・想像力の欠如

また、生徒達は言葉によつて感動しにくくなっている。ビジュアル世代という言葉もあるが、言葉によつて伝えられる状況を想像することが苦手であり、言葉によつて語られる人間の感情や思想に感情でもつて答えられない。たとえば生徒達が時事問題に弱い、というのもこのようなことが大きな原因であろう。新聞やテレビで報じられるような様々な事件の起こる社会と自分の生きている社会をつなぐことができない。書いてあることを理解したとしても、漠然とした意見や感想しかもてないのだ。

漢文には、このような言葉によつて感動できない生徒、想像力の乏しい生徒に、はつきりとその生きる姿を示してくれる作者、作品がある。古典として読まれる漢文の特徴は、文章でも詩でもそこから力強い思想がうかがえることである。日本の古典に思想がないというのではないが、相対的にみて漢文のほうが、人間の生き方についてははつきりと示す、という特徴をもつのではないかと考える。

漢文に強くあらわれる人間の生き方を漢字を通して読み取ろうとするとき、生徒達は、漢字ひいては言葉が一面的

なものではなく、書き手の立場や思想や感情を深く内包しているのだ、ということに気づくと考える。

そして、そうした活動は、教材の力に媒介されて、生徒達の言葉を感じる力・想像力を育てていくと期待される。

漢文の性質を引き出すために（詩と文章の関連）

このような考えをもつて、今回「漢詩と文章の有機的連関を図る」授業を試みた。「漢文の詩と文章の有機的連関を図る」とは、漢詩と文章をからみあわせて読むことによる読解と、読解の先にいる作者や登場人物への接近を図ることをさす。一つの話が文章と詩で構成されるとき、文章は詩の生まれてきた状況について説明し、漢詩は作者の感情や思想を表出する。それゆえ、漢詩を中心に据え、漢詩にうたわれた思想や心情を深く理解するために文章を読み解いて行く、という活動を取り入れることによつて、作者の感情や思想により近く迫ることができると考えた。

また、その過程で、漢字の読み、形と漢字の意味の照らし合わせを行わせることによつて、漢文における漢字の機能を再発見、自覚させることを企図した。

三 授業の概略

次に挙げるのは一学期に続けて行った二つの单元である。対象は高等学校二年一クラス（男子二十四名）

この二つの単元は、前述の、言葉から人間の思想や感情を感じ取るという目標を念頭に置き、文章と詩とを関連させて読み深めさせるという手立てをもって行ったものである。

一つ目の単元「漢詩の訳詩集をつくらう」は、漢詩の主題をつかみ、直訳したものを脚色し、訳詩として完成させることで、作者に近づき、漢詩の思想性、叙情性を認識させることを目的とした。

二つ目の単元「史記列伝（人間を読む）」は、「伯夷叔斉伝」を題材としてとりあげた。先の単元での漢詩の主題を探った活動を生かし、伯夷叔斉のよんだ漢詩を鍵として伯夷叔斉の信念と司馬遷の思想に迫ることを目的とした。

「伯夷叔斉伝」はそのまま読むと、最後の二人が餓死する直前の場面で漢詩をよむことになるのだが、今回は、文章を目的をもって読ませることと、伯夷叔斉の訴えをより強く感じ取らせることを意図し、この漢詩だけを先に取り出して生徒に読ませた。その際、二人の心情を読み取ることでできる箇所を指摘させ、また漢詩を読んだだけでは分からない点についても指摘させた。その後、文章を読み内容を理解させ、そこからもう一度漢詩に取り組ませることとした。

I 漢詩の訳詩集をつくらう

i 単元設定の理由

まず生徒に、漢詩は人が何かを感じ考えた所から生まれているのだ、ということを意識づけたいと考えた。そこで、いくつかの漢詩の中でひとつ気に入った詩を選ばせ、グループをつくって詩を朗読し、詩の主題をつかみ、その主題にあうように訳す、という作業に取り組ませた。

ii 授業の概要

単元目標

(1) 詩の修辭や構成が詩の主題をいかに引き立てているか、考えさせる。

(2) 自分の選んだ詩にたいして感想をもたせる。

教材

「江南春」「春望」「秋風引」「秋夜寄丘二十二員外」

「峨眉山月歌」「磧中作」

指導過程

第一次（二時間）

① これからの作業について説明する。

② 「春夜」をこれからの作業の例として全員で読解させる。

③ 自分の取り組む詩を選ばせる。

第二次（二時間）

① 選んでおいた詩によってグループに分かれ、活動させる。

第三次（一時間）

① 各グループに発表させる。

iii 授業の工夫

解釈ポイントの設定

「解釈ポイント」とは、漢詩を觀賞する際に是非とも考えてほしいと思われる点に関して教師の側が設定した質問である。この「解釈ポイント」をヒントとして、これに答えることで、その詩の特徴や個性、思想を發見し、主題に迫り、訳詩作成の手立てとすることができるよう工夫した。

（資料A参照）

II 史記列伝／人間を読む

i 単元設定の理由

「史記」は司馬遷の諦観と野心のこもった作品である。運悪く時の中にうずもれてしまった英雄たちを掘り起こし、自分の手によって後世にその名を残してやろうという司馬遷の執筆意図をとらえ、またそのような目で掘り起こされた人物たちの生き方を読むことは、生徒達に言葉、漢字を通して、自分の信念をもって生きる力強い人間を感じ取らせることになるだろうと考えた。

また「伯夷叔齊伝」を読むにあたっては、二人が餓死する直前に詠んだ詩に注目し、そこに強く表れる二人の感情を読み取ると同時に、文章中の二人の言動から二人の思想を読み取り、これらの思想信念の強さとそれが報われなかつたときの激しさを感じ取らせることをねらった。

ii 授業の概要

単元目標

- (1) 主人公の詠む詩の主題をとらえることで主人公の思想を読み取らせる。
- (2) 漢文の中から思想、訴えを読み取らせる。

指導過程

第一次（一時間）

- ① 「史記」について、特に司馬遷の執筆意図について知るために、概説プリントと中島敦の「李陵」の一部を読ませる。

- ② 「李陵」の中に書かれてあつた司馬遷の執筆当時の気持ちと執筆の意図をまとめさせる。

「李陵」から読み取ることのできる

司馬遷の執筆当時の気持ちと執筆意図

司馬遷

・善悪ではなく、認めてくれる者の有無によって左右されてしまう運命の理不尽さに憤る

・人間の運命について諦観をもつ。
「運命」抗い難さへの反発と執着

「史記」完成への力

第二次（一時間）

- ① 伯夷・叔斉伝の中の、二人が餓死する直前に詠んだ詩を訳させる。
- ② 詩の中から心情が表れている部分を抜き出し、その心情をまとめさせる。
- ③ 詩を読んだだけではわからない点を挙げさせる。

〈伯夷叔斉の詩の中で心情の表れている箇所〉

「以暴易暴兮 不知其非矣」

「以暴易暴」を「非」（過ち）とし、

「過ちを知らない」という望ましくない

状況を詠う。

「神農虞夏忽焉没兮 我安適婦矣」

「私たちはどこへ身を落ち着けたらよいのか

いや身を落ち着ける所などない」

「神農虞夏」といった理想的君主がいなくなつたために身の落ち着け場所がない、と理想的君主のいない状態を嘆く。

「于嗟徂兮」 「死」の決意

〈詩の疑問点〉

- ① なぜ「薇」を採って食べる状況になつてしまつたのか。
- ② 「以暴易暴兮」とは誰のどのような行為を指すのか。
- ③ なぜ「我安適婦矣」という状況になつたのか。
- ④ 二人が身を落ち着けたい所はどのような所か。

第三次（二時間）

- ① 伯夷・叔斉伝の本文を口語訳させる。
- ② 伯夷・叔斉の言動を抜き出させる。
- ③ 二人の言動から二人の考え方を把握させる。

第四次（一時間）

- ① 第二次の③で挙げておいた疑問点を解決させる。
- ② 伯夷・叔斉の詩の主題をつかませる。

第五次（二時間）

- ① 「天道是邪否邪」から司馬遷の意見・立場を読み取らせる。

iii 授業の工夫

◎漢詩に込められた心情・思想の追及

伯夷・叔斉の詩が二人のどんな心情や思想を含んだものなのか、ということを目的として本文を読ませ、最後にまとめさせた。

◎板書の工夫

第四次の板書では漢詩に読み込まれた事実をわかりやすく把握していくため、また一字一字に着目させるために、紙に書いたものを黒板に磁石で張り付けた。〈第四次〉

四 授業の実際

ここでは、単元「史記列伝―人間を読む―」のうち、特に重点を置いた第四次について、詳細を述べたい。

○本文の指導目標

- 1 伯夷・叔斉が死に至らざるを得なかった理由を考えさせる。
- 2 詩に詠み込まれている伯夷・叔斉の訴えを理解させる。

○本次の指導事項

〈詩の疑問点（第二次で出たもの）からの展開〉

- ① 何故「薇」を採って食べる状況になってしまったのか。

◎「薇」を採って食べるということが周の扶持米を食べないということを指すのだということに気づかせる。

◎二人が周の扶持米を食べない理由を考えさせる。

②「以暴易暴兮」とは誰のどのような行為を指すのか。

◎「以暴易暴兮」の主語が武王であると気づかせる。

◎「暴①」が武王の暴政を指し、「暴②」が紂王の暴政を指すことを確認。

◎紂王が暴君として有名だったことを示唆し、同じ「暴」という漢字で定義された武王の政治はどのようなものか考えさせる。

◎武王の政治を絶対的に批判する伯夷叔斉の理想を探らせる。

③なぜ「我安適帰矣」という状況になったのか。

◎伯夷叔斉が死のうとした理由をまとめさせる。

④二人が身を落着けたい所はどのような所か。

⑤現在の政治状況はどうか。

◎各自でプリントに書かせる。

〈詩の主題の考察のまとめ〉

○第四次板書

「采其薇矣」

①なぜこのような状況になったのか。

二人は 周粟 を食べなかつた。

正義

伯夷叔斉恥之 義不食周粟

宗周 (周室を天子とする)

・二人は周を恥じたから。

②「以暴^①易暴^②」とは？

武王が紂王(殷)を武力でもって倒し、周を建国したこと。

周 暴^① ↑ 暴^②

殷 其非

武王 紂王(暴君として有名)

父死不葬 以臣弑君

孝が欠け 仁が欠けている

武王 孝・仁に欠け武力だけの暴君である。

伯夷叔斉の理想とする君主 孝・仁を大切に、武力を行使しない。

詩の訴え 孝・仁を信念とする理想的君主がいなくなつてしまったことへの嘆き

○指導過程と学習者の反応

◎二つの「暴」について

二つの「暴」が何と何を指すのか。二つを区別するために①②と番号をつけた。

◎「以暴易暴兮」の主語

「以暴易暴兮」のことを「その非」つまり過ちとしているところから、この人物は伯夷叔斉が非難していた人物であることが分かる。

生徒は「諫めて曰く」と書かれた伯夷叔斉の言葉に目をつけ、武王という答えをみちびきだした。

◎「易」何が交替したのか。

武王が何を何に「易」えたのか、武王の起こした変化は何だったのか、と発問すると、生徒は紂王の支配から武王の支配へかえたと答えた。これで二つの「暴」の正体がわかつた。

◎なぜ伯夷叔斉は、同じ「暴」という文字をつかつたのか。

紂王が暴君という有名だったことは語注にもある。伯夷叔斉が武王をその暴君と同じだとするのは武王のどういふ点か。ここで文章中を探させた。生徒達は伯夷叔斉の言葉の中から「父死して葬らず」と「臣をもつて君を弑す」を抜き出した。

◎伯夷叔斉は武王の行為をどのようなものと見ている

か二人は武王の行為について意味付けしている言葉を探させると、生徒は「孝というべけんや」「仁というべけんや」という反語に気が付いた。「孝」が欠け、「仁」が欠けている、と板書し、武王の政治についてまとめさせた。

◎二人の理想的君主像についてまとめさせた。

○反省

最初に漢詩だけをよんで心情を抜き出すという作業は生徒には難しかったようである。結局、教師側が手助けをしてしまった。ただ、「死にたい」という思いだけははつきりと読み取れるものだったので、ここを糸口にして行くことはできそうである。

短く書かれた出来事の中から二人の理想とするものをはつきりと理解するのは困難だったようだ。「仁」や「孝」は辞書などで調べさせたり、「仁」「孝」の意味の分かる参考書を用意すべきであった。

この単元ではグループ活動などの学習者主体的活動をあまり取り入れなかった。ただ、プリントに書き込むという作業は、授業の中で取り入れた。講義形式をとったのは、生徒たちの考えの発展よりも、作者や作中人物の生き方を漢字から読み取る、知るところに重きをおいたためである。しかし、自分たちの考えや感想を書いたり発言す

る機会が少なかったことは生徒達の記憶をはやく薄れさせるだろうし、やはり生徒の人間観にまで訴えることにならなかったかもしれない。また新たな方法を探りたい。

五 今後の課題

表現活動の導入

「漢文の詩と文章の有機的関連を図る」とは、簡単に言えば、漢詩と文章をからみあわせて読むことによる深い読解と、深い読解の先にいる作者や登場人物への接近を図ることだったのだが、やはりこの目的を達成するためには表現の場が必要だったように思う。まずは理解のための表現、例えば漢詩を会話文に直してみるとか、伯夷叔斉の嘆願書を書いてみるといった活動を取り入れるならば、生徒は書くにあたってもう一度一つ一つの漢字の意味を調べ直し説明の言葉を探すだろう。さらに、例えば伯夷叔斉を見習って激しい政治批判をさせてみるというような表現活動も、生徒が自身を見つめる機会となつて有効だろう。

漢詩と文章との関連付け

同じ主題をもつ漢詩と文章をよみあわせるといった活動、同じキーワードを持つ漢詩や文章を比べ読みさせる活動、同じ時代や環境の中でつくられた漢詩と文章との比較といった活動など、取り入れてみたい活動はいろいろあるが、言

葉と意味、そしてそれらと発する人間とのつながりをより意識させる、ということに常に念頭に置いて取り組んでゆきたい。そのためにも、説明的要素の少ない漢詩を生徒の主體的な活動によつて読み深めていく授業、文章の横に表現方法や表出するものの違う漢詩を置いてその違いを読み生かす授業について、考えてゆきたい。

(松山聖陵高等学校)

資料 A

漢詩

春望 杜甫 (主題)

戦争の後、国がおとろえていく姿を悲しく思っている。

国破山河在、城春草木深。
感時花溅泪、恨别鸟惊心。
烽火连三月、家书抵万金。
白头搔更短、浑欲不胜簪。

〈構成〉詩型 (五言律詩)

深 心 金 簪
押韻 (二・四・六・八)

〈解釈ポイント〉

①五句「烽火連三月」とはどのような状態か

戦争が続いていて国土の荒れるさまを「のろしの火」で表している。

②六句「家書抵万金」から分かる作

〈語注〉

烽火—のろし
家書—家族の手紙
城—ここでは長安のこと
恨—うらむ 不安に思う 怒りにくむ 悲しむ くらむ
抵—あたる さわる 相当する こぼむ 上げる
連—ひきつづく 一列になる しきりに
渾—①にこる ②水のわき出る音
簪—③すべて 全く ①かんざし 冠のピン

者と作者の家族の状況と心情を書き出してみる。

← 家族は遠い所に居り、なかなか会えない戦乱のこともあり、手紙も届きにくいかもしれない。

③七句、八句から分かる作者の姿、心情を書き出してみる。

← すっかり年老いてしまった自分の姿をこのおとえろえた唐の姿と対比させている。

← 年老いた身で、独りでさびしく暮らしている。

〈文法ポイント〉
律詩―近体詩。一句が五言または七

言の八句から成り、各々の二句ずつを一組とする。

一、二点―二字以上離れた字に返るときに使う。

押韻―五言なので二・四・六・八の句になる。七言では、一・二・四・六・八の末尾にくる。

漢詩 春望 杜甫

○「春望」の書き下し文の調子を生かしている。

訳文

かつて栄えていた長安の都は、すっかり荒廃し、
都是春であるのに、人影なく、草木が繁茂している。

時にせつなくなつては、花にも涙を流し、
別れを惜しんでは、鳥の飛び去るのにも、心を驚かす。

戦の、のろし火は三カ月に続き、家族からのめつたに來ぬ手紙は、万金の価値がある。

私のすっかり白くなつた頭をかけば、更に短くなつてい
もう冠のピンをとめることもできなくなつてしまった。